

## 5) コンドーム使用と性行動

過去半年のアナルセックスをする際のコンドーム使用とコンドーム使用の〈負担感〉の関連を検討した。

アナルセックス（挿入）のコンドーム使用（Q22）、アナルセックス（受け）のコンドーム使用（Q23）については、「必ず使った」と「だいたい使った」を「使用」、それ以外を「使用以外」として2群で分析を行った。〈コンドーム使用の負担感〉（Q38）についても「非常に大きい」「かなり大きい」「やや大きい」と回答したものを「大きい」群とし、「どちらでもない」「どちらでもない」群、「やや小さい」「かなり小さい」「非常に小さい」と回答したものを「小さい」群とし、3群を比較した。

アナルセックス（挿入）のコンドーム使用（Q22）と〈コンドーム使用の負担感〉（Q38）のクロス表を示す（表1）。 $\chi^2$  検定を行った結果、アナルセックス（挿入）のコンドーム使用と〈コンドーム使用の負担感〉の関連は有意であった [ $\chi^2$  (2)=8.196,  $p < .05$ ]。アナルセックス（挿入）時にコンドームを使用している群は、そうでない群よりも、〈コンドーム使用の負担感〉が小さい傾向が示された。しかし、コンドーム使用群でも〈コンドーム使用の負担感〉が「大きい」と回答した人が19.4%おり、コンドーム使用に負担を感じながら用いていることが示された。

アナルセックス（受け）のコンドーム使用（Q23）と〈コンドーム使用の負担感〉（Q38）のクロス表を表2に示した。 $\chi^2$  検定を行った結果、アナルセックス（受け）のコンドーム使用と〈コンドーム使用の負担感〉の関連は有意であった [ $\chi^2$  (2)= 14.782,  $p < .001$ ]。アナルセックス（受け）時にコンドームを使用している群は、そうでない群よりも、〈コンドーム使用の負担感〉が小さい傾向が示された。

また、コンドーム「使用以外群」に注目すると、アナルセックスの挿入（Q22）と受け（Q23）ともに、〈コンドーム使用の負担感〉が「大きい」と回答した人と「小さい」と回答した人もともに約4割を占めた。このことから、コンドームを使わない人の〈コンドーム使用の負担感〉は、一律ではなく個人によって違いがあると考えられる。

表1. Q22 と Q38 のクロス表

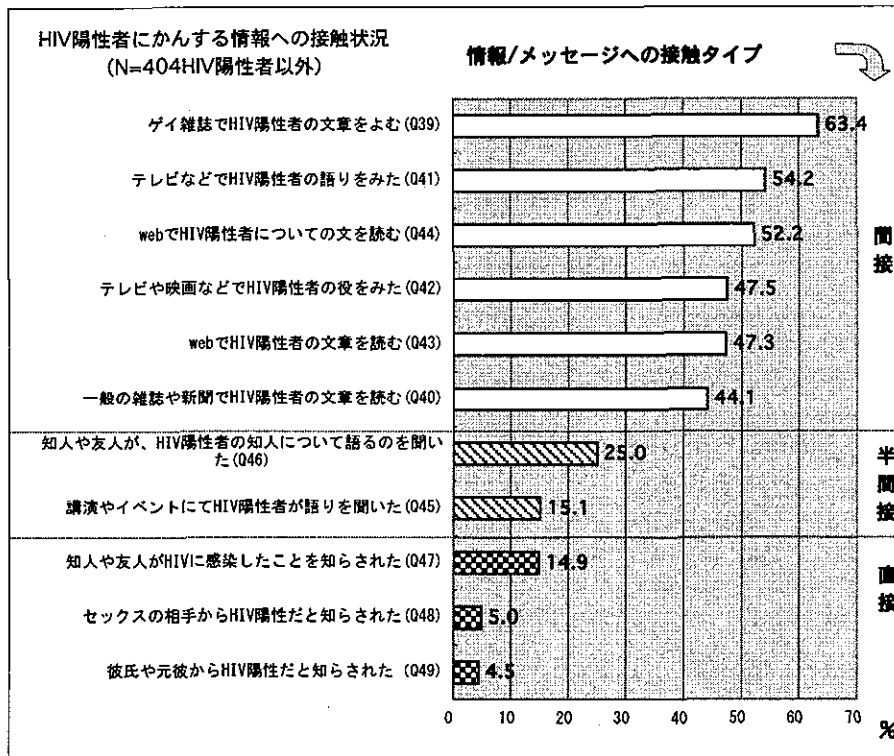
		Q22 アナルセックス（挿入） のコンドーム使用			
		使用	使用以外	合計	
Q38 負担感	大きい	度数	21	27	48
		%	19.4	38.0	26.8
	どちらでもない	度数	31	19	50
		%	28.7	26.8	27.9
	小さい	度数	56	25	81
		%	51.9	35.2	45.3
合計	度数	108	71	179	
	%	100.0	100.0	100.0	

表2. Q23 と Q38 のクロス表

		Q23 アナルセックス（受け） のコンドーム使用			
		使用	使用以外	合計	
Q38 負担感	大きい	度数	13	26	39
		%	13.5	40.0	24.2
	どちらでもない	度数	30	14	44
		%	31.3	21.5	27.3
	小さい	度数	53	25	78
		%	55.2	38.5	48.4
合計	度数	96	65	161	
	%	100.0	100.0	100.0	

## 6) LT メッセージ

### 「間接、半間接、直接の接触状況」グラフ (Q39-49)



HIV 陽性者によるメッセージを、直接本人から聞くものから、HIV 陽性者が書いたものを読むという間接的なものまで接触状況を調査した。その結果、一般メディアでの HIV 陽性者に関する情報に触れる機会が 44.1%であるのに比較し、ゲイ雑誌にて HIV 陽性者の手記をよんだ経験があるものが 63.4%と高い割合であった。

図 22

また、今回の分析においては、HIV 陽性者の情報やメッセージを「LT メッセージ」と呼び、その内容によって、間接 LT メッセージ、半間接 LT メッセージ、直接 LT メッセージに分類した。間接 LT メッセージは Q39～44、半間接 LT メッセージは Q45 と 46、直接 LT メッセージは Q47～49 の「ある」という回答を 1 点として合計し、LT 得点とした。

#### 6-1) 居住地域と LT メッセージ

居住地域による LT メッセージの接触状況の違いについて分析した。居住地域は首都圏・政令都市と首都圏以外の 2 群とした。

間接 LT 得点は 0～3 点を低群、4～6 点を高群とし、2 群での分析を行った。その結果、間接 LT 得点と居住地との関連は認められなかった (表 3)。

半間接 LT 得点は、なし (0 点)、あり (1 点以上) の 2 群での検討を行った (表 4)。 $\chi^2$  検定では、半間接 LT 得点と居住地との間に有意差が認められ [ $\chi^2 (1) = 5.061, p < .05$ ]、首都圏・政令都市では、それ以外の地域より半間接 LT 得点が高い傾向がみられた。

直接 LT 得点は、なし (0 点)、あり (1 点以上) の 2 群で検討した (表 5) が、居住地との関連は認められなかった。直接 LT メッセージを受領している人数の少なさも、統計的に有意な結果が得られなかった原因の一つと考えられる。

以上より、間接 LT 得点では地域差が認められなかったのに対し、半間接 LT 得点においては地域差があることが示唆された。つまり、メディアを通しての情報では地域差は認められないが、自分の身近な人からの情報には地域差があることが示された。この結果から、非都市部では、身近な生活圏のなかでの HIV 感染者の情報への接触頻度が少ない可能性があると考えられる。

表 3. 居住地域と間接 LT 得点

		間接LT (2群)		合計	
		低群	高群		
Q3 居住地	首都圏+政令	度数	122	103	225
		%	55.0	56.9	55.8
	「首都圏+政令」以外	度数	100	78	178
		%	45.0	43.1	44.2
	合計	度数	222	181	403
		%	100.0	100.0	100.0

表 4. 居住地域別と半間接 LT 得点

		半間接LT (2群)		合計	
		なし	あり		
Q3 居住地	首都圏+政令	度数	146	79	225
		%	52.1	64.2	55.8
	「首都圏+政令」以外	度数	134	44	178
		%	47.9	35.8	44.2
	合計	度数	280	123	403
		%	100.0	100.0	100.0

表 5. 居住地域と直接 LT 得点

		直接LT (2群)		合計	
		なし	あり		
Q3 居住地	首都圏+政令	度数	185	40	225
		%	54.3	64.5	55.8
	「首都圏+政令」以外	度数	156	22	178
		%	45.7	35.5	44.2
	合計	度数	341	62	403
		%	100.0	100.0	100.0

## 6-2) コンドーム使用予測と LT メッセージ

Q24 の理想的な相手との<コンドーム使用予測>と LT メッセージとの接触状況との関連を検討した。Q24 の「確実に使用できる」と「たぶん使用できる」を使用群、「どちらともいえない」群をそのまま、「たぶん使用できない」と「確実に使用できない」を不使用群として、3群で検討した。

間接 LT 得点とコンドーム使用予測とのクロス表を表 6 に示す。 $\chi^2$  検定を行った結果、間接 LT 得点と<コンドーム使用予測>との関連が認められた [ $\chi^2 (2) = 8.164, p < .05$ ]。間接 LT 得点が高いと、<コンドーム使用予測>は高くなる傾向がみられた。

半間接 LT 得点と<コンドーム使用予測>とのクロス表を表 7 に示した。 $\chi^2$  検定の結果、半間接 LT 得点と<コンドーム使用予測>との関連が認められた [ $\chi^2 (2) = 8.300, p < .05$ ]。半間接 LT 得点が高いと<コンドーム使用予測>も高くなる傾向がみられた。

直接 LT 得点と<コンドーム使用予測>とのクロス表を表 8 に示した。分析の結果、直接 LT 得点と<コンドーム使用予測>との関連は認められなかった。

以上の結果から、<コンドーム使用予測>は間接および半間接 LT メッセージへの接触で高まる傾向があることが示された。直接 LT メッセージについては、今回のデータでは接触している人数が少なかったため、その効果については十分な検討ができなかった。

表 6. 間接LT 得点とコンドームの使用予測

		間接LT (2群)		合計	
		低群	高群		
Q24 コンドーム 使用予測	使用	度数	122	121	243
		%	55.2	66.9	60.4
	どちらとも 言えない	度数	53	40	93
		%	24.0	22.1	23.1
	不使用	度数	46	20	66
		%	20.8	11.0	16.4
合計	度数	221	181	402	
	%	100.0	100.0	100.0	

表 7. 半間接LT 得点とコンドームの使用予測

		半間接LT (2群)		合計	
		なし	あり		
Q24 コンドーム 使用予測	使用	度数	156	87	243
		%	55.9	70.7	60.4
	どちらとも 言えない	度数	70	23	93
		%	25.1	18.7	23.1
	不使用	度数	53	13	66
		%	19.0	10.6	16.4
合計	度数	279	123	402	
	%	100.0	100.0	100.0	

表 8. 直接LT 得点とコンドームの使用予測

		直接LT (2群)		合計	
		なし	あり		
Q24 コンドーム 使用予測	使用	度数	206	37	243
		%	60.6	59.7	60.4
	どちらとも 言えない	度数	77	16	93
		%	22.6	25.8	23.1
	不使用	度数	57	9	66
		%	16.8	14.5	16.4
合計	度数	340	62	402	
	%	100.0	100.0	100.0	

6-3 LT メッセージと身近感

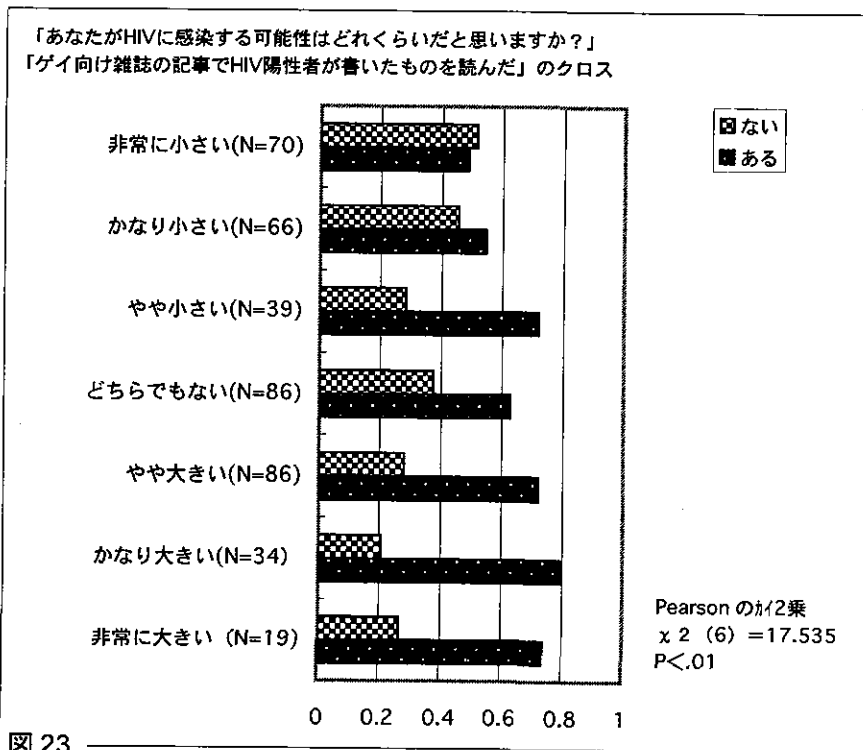


図 23

LT メッセージへの接触状況についての項目では、ゲイ雑誌の回答者が63.4%と最も多く、「あなたが HIV に感染する可能性はどのくらいだと思うか」との有意な関連が認められた。雑誌を読んでいる人は、HIV 感染する可能性を身近に感じていた。

## D. 考察

### 1) 対象者の特性

今回の web 調査の対象者は、10～30歳代までの年代で8割を占めた。また、セックスの相手との出会いや交流などを目的としてwebを利用する割合の高い集団であった。今回の調査では、対象を男性とセックスする男性（MSM）としたが、HIV/AIDSに対する知識や関心が高く有する集団であり、かつHIV/AIDSに関する情報に接する機会も多い集団であった。

調査結果から、バーやハッテン場の利用経験がないという回答者が4割を占めていた。このことから、特定の場所に限定した方法による啓発メッセージは、この4割の人たちに届かない可能性がある。そのため、既存の啓発に加えて、場所や地域性に依存しないwebによる啓発が重要であると考えられる。

### 2) コンドーム使用の負担感/身近感

アナルセックスの際のコンドーム使用とその負担感について調べたところ、アナルセックス（挿入）とアナルセックス（受け）の両方において、＜コンドーム使用の負担感＞と実際のコンドーム使用には、有意な関連がみられた。つまり、アナルセックスの際にコンドームを使用している人の＜コンドーム使用の負担感＞は、使用していない人の＜コンドーム使用の負担感＞よりも、小さい傾向があった。コンドームを使用する群では、＜コンドーム使用の負担感＞を感じていない傾向が認められた。

しかし、コンドームを使用していない群については、＜コンドーム使用の負担感＞にばらつきがある。アナルセックスの際にコンドームを使用しない群のうち、＜コンドーム使用の負担感＞が「大きい」と回答した人と「小さい」と回答した人は、それぞれ約4割を占めていた。コンドームを使用しない群においては、＜コンドーム使用の負担感＞が必ずしも直接的に関連しているわけではなく、個人差が大きいことが考えられる。

この点については、しかし、コンドームを使用している人の＜負担感＞と、コンドームを使用していない人の＜負担感＞の内容が異なることも考えられる。そのため、＜コンドーム使用の負担感＞を単に変数として扱うのではなく、今後は＜負担感＞の具体的な内容について明らかにすることで、コンドームの使用行動へ関連する指標として利用できる可能性があると考えられる。

### 3) LTメッセージ

今回の結果から、LTメッセージへの接触は＜コンドーム使用予測＞の認知を高めることが明らかになった。＜コンドーム使用予測＞の認知の向上は、コンドームの使用行動を高めると考えられ、LTメッセージの提供は、有効な啓発であることが示唆された。

また、ゲイ雑誌に掲載されているHIV陽性者による手記を読む体験がHIVを身近に感じることに関連することが示された。ゲイ雑誌という媒体によるLTメッセージは、MSMにとってピアなメッセージとして伝わり易いと思われる。

HIV/AIDSに関する認知が高いにも関わらず、回答者の2、3割がコンドーム使用が低かった。そのため、今後は知識の提供という啓発活動のみではなく、より親しみ易い媒体からのLTメッセージによりHIV/AIDSを自分の身近な問題として実感できるような啓発活動が重要であると考えられる。HIV 感染に関する認知が高く、保健行動に関する認知も高いこの集団の特性を踏まえると、

LTメッセージを活用するなどの新たな啓発が有効だと思われる。LTメッセージの内容や効果的な使用方法については、さらなる検討が課題とされた。

また、間接LTメッセージには地域差がみられなかったことから、場所に依存した形でのメッセージが届きにくい対象者には、webなどのメディア媒体を使った啓発も有効であると考えられる。

## E. 結論および今後の課題

HIV陽性者がすでに共に生活しているという感覚（LIVING TOGETHER）の認知を高めるためには、HIV陽性者による手記をピアなメッセージとしてゲイ雑誌等のメディア媒体を通じて読む行為が有効であることが判った。「(理想的な相手とのセックスにおいても)コンドームを使用できるだろう」という〈コンドーム使用予測〉は、実際のコンドームの使用行動に影響する認知と考えられる。今回、〈コンドーム使用予測〉とLTメッセージとの関連が明らかになったことから、コンドームの使用行動へのLTメッセージの提供による介入が有効であることが示唆された。MSMにとって、ゲイ雑誌など身近なメディア媒体でLTメッセージに触れる機会があることは、啓発を受けるレディネス（準備性）が高いともいえるかもしれない。今回は、LTメッセージの内容や文脈、受信時の状況については把握できていないが、LTメッセージの内容とともに、LTメッセージの受け手の関心や意識についても把握する必要がある。

今後は、地域の特性を踏まえて、直接的なメッセージ、間接的なメッセージなど様々な形で、LIVING TOGETHERE的なメッセージの流通量を増やしていくことが重要だと思われる。HIV陽性者からの情報やメッセージへの接触状況は、首都圏とそうでない地域で異なっていた。間接LTメッセージは地域による差が少なく、地方への啓発にはとくに有効な手段となる可能性を有している。

HIV陽性者数の報告においても、現在では地域差が大きく、地方では直接的にLTメッセージに触れる機会もそれに比例して少ないことが想像される。しかし、今後は地域の特性に合わせて、直接、間接、半間接というLTメッセージを活用し、地域の現状に即した啓発パッケージを開発することが求められよう。

今回の調査からは、直接、間接、半間接にLTメッセージに触れた人への影響の違いは明かにできないが、引き続き、方法や媒体による効果の違いを明らかにしていきたいと考えている。

今回はMSMを対象に調査を実施したが、他の集団でも同じような傾向がみられるかどうか、さらなる検討が必要である。今後、多様なルートでHIV感染が広まる可能性が懸念されていることから、異性間の性行為で感染したHIV陽性者による情報やLTメッセージと、同性間で感染したHIV陽性者による情報やLTメッセージの違いや啓発効果についても、検討していくべきだろう。

## 参考文献

葦田竜也，砂川秀樹，生島嗣，池上千寿子：男性同性間の性行動におけるコンドーム使用/不使用に関する研究。エイズに関する普及啓発におけるNGOの活用に関する研究報告書，2002。

ぷれいす東京：Living Together LETTES（2004）Living Together PR版（2004）

市川誠一：男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究。平成15年度厚生労働科学研究費エイズ対策研究事業報告書，2004。

生島嗣：LIVING TOGETHERという戦略ーリアリティをどう共有するかー。エイズ学会誌6：127，2004。

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）

HIV 感染予防対策の効果に関する研究

分担研究報告書

介入実践のための人材育成

分担研究者：池上千寿子・生島嗣・兵藤智佳（ぶれいす東京）

東優子（ノートルダム清心女子大学）、徐淑子（新潟県立看護大学）

研究協力者：野坂祐子（大阪教育大学）、牧原信也（エイズ予防財団リサーチレジデント）、

中村美亜・勝又里織（ぶれいす東京）

研究要旨 初年度からの継続として（財）日本性教育協会と連携し4回の人材育成講座を実施した。毎回30名を限度とするワーク形式の講座であり連続受講による参加を優先した。今年度の参加者は83名である。対象は学校や地域で若者の性と健康に関する授業や活動をしている教師、保健師、助産師などである。4回の講座内容は研究班全体で構成し、研究成果をもりこみつつ、性教育がやりにくくなっている現状をふまえて、あらためて参加者のエンパワメントと交流を図った。今年度から受講修了者に修了書を発行している。今年度4回連続受講生の一人は勤務する専門学校に申請し来年度より新入生を対象に「性と健康」の講座を必須カリキュラムとして新設することに成功した。これは本研究の貴重な成果である。

A. 研究目的

介入実践のための人材育成プログラムとして、昨年度の連続4回講座「最新 Sexual Health 教育の実践的進め方—セクシュアル・ヘルスをめざして—」に引き続き、今年度も4回にわたる講座を企画・実施した。

本年は「性教育のための実践セミナー—セクシュアル・ヘルスの気づきから工夫へ—」と題し、セクシュアル・ヘルスをキイ概念としながら、介入者の個別の気づきを活かし、多様で主体的な実践につながることを目指した。

B. 研究方法

(1) セミナーの参加者の募集

本セミナーは2コースからなり、それぞれ全2日間の日程である。コースⅠは2004年8月22日（日）と8月28日（土）、コースⅡは2005年2月5日（土）と2月6日（日）であり、いずれも10時から16時40分である。会場は、東京都内にある（財）日本性教育協会の研修室である。

対象者は、地域や学校で性教育実践や、若者の性の健康に関する予防介入を行っている教師、保健師、助産師、心理士などである。応募の際は、所属先と立場のほか、これまでに行ってきた性教育実践の有無と内容、本セミナーへ期待していることや実践の際に困っていることを記入してもらい、ニーズに即した内容となるようプログラム構成の参考にした。

広報は、（財）日本性教育協会の協力を得て、ホームページへの掲載、メーリングリストやチラシによって案内を送付したほか、対象者がアクセスしやすい情報誌等へ情報を掲載した。毎回30名を定員とし、のべ90名の申し込みを受け付けた（実際の受講生は83名）。コース修了後に2日

間の連続受講生に対して、NPO ふれいす東京と（財）日本性教育協会が発行するセミナー修了証を授与した。

## （2）セミナー・プログラム

本セミナーは、過去に NPO ふれいす東京が行ってきた研究成果を反映させ、若者の保健行動やジェンダー、メディアの影響等、実証的データをもとに構成されている。さらに、昨年度に実施したセミナーの評価や反省により、学習の流れや課題などを再構成した。

セミナーの内容は、国内外でのさまざまなセクシュアル・ヘルスおよび保健行動に関する研究からの知見の共有、性に対する態度の自己覚知や脱感作、予防啓発ツールとしてのビデオ教材やゲーム集の活用や応用などを含む。また、セクシュアル・ヘルスに関わる権利としてのプライバシーや個人情報の扱いなども取り上げた。昨年度からの継続参加者やすでに介入実践を行っている参加者のために、学校や地域での介入や他機関との連携を視野にいれた事例検討も含んでいる。

また、学習方法は一方的な知識の詰め込み型学習ではなく、講師と参加者、および参加者同士の相互的な学習や参加体験型学習を基本とした。内容によって、講義形式、グループワーク、全体ワーク、アクティビティなどを組み合わせた。グループワークでは、ワークシートを開発し、自己覚知を促すことを目指した。さらに、グループワークの実施の際は、ファシリテーターによる介入のもと、ふれいす東京が作成したグランドルールに基づく安全な環境づくりに努めた。参加者のプライバシーや個人情報の扱いにも配慮した。

4回の主な内容は、以下のとおりである。

### <コースⅠ：第1回>

日時：2004年8月22日（土）

内容：「性教育概論」、「学校現場におけるセクシュアル・ヘルス」、「セクシュアル・ヘルスの世界の動向」等

### <コースⅠ：第2回>

日時：2004年8月28日（日）

内容：「セクシュアル・ヘルスへのアプローチと課題」、「個人情報の管理・プライバシーの権利について」、「安くて楽しいからだ発見ワークショップ」他

### <コースⅡ：第3回>

日時：2005年2月5日（土）

内容：「セクシュアル・ヘルスとジェンダー」、「セクシュアル・ヘルスに関するメディアリテラシー」等

### <コースⅡ：第4回>

日時：2005年2月6日（日）

内容：「介入事例についての連携シミュレーション」、「社会資源の活用と連携」等

## 倫理面への配慮

受講生どうしのプライバシーの遵守をグランドルールを用いて説明し、同意を得たうえで参加型ワークショップを実施している。



## C. 研究結果

まず、昨年度からの継続研究による人材育成セミナーであり、引き続き（財）日本性教育協会の協力を得られたことから、昨年度に引き続き参加者や、昨年度の参加者からの紹介による参加者を得ることができた。これは学習の積み上げ効果のみならず、実践者のネットワークの拡大や安定した学習の場の提供という意味でも、成果があったといえる。参加者同士の交流や積極的な関係性の構築もみられ、人材育成セミナーの副次的な効果と考えられる。

本年の人材育成セミナーでは、昨年度の評価をふまえるとともに、申込者の事前アンケートにより参加者のニーズを把握し、よりニーズに即したプログラムを構成することができた。そのためか、各講義では積極的な質疑が出され、ワークショップでも意見が多く出され、参加者相互の学びあいの場がつけられた。

アンケートの結果では、プログラムに対する評価は良好であり、感想には「参加体験型のワークで他者の意見に触れることができ、自分の性に対する価値観に気づきが深まった」というものが多かった。また、ワーク中だけの交流に留まらず「他の参加者との情報交換が役立った」、「ネットワークづくりに役立った」という声も寄せられた。ほかに、本セミナーの構成やファシリテーターの動きについて、「自分の実践の参考になった」という意見もあった。「モチベーションがあがった」「充電できた」という参加者のエンパワメントにもつながられたようだった。

## D. 考察

セクシュアル・ヘルス教育のための人材育成における 2 年目の実践として、本セミナーの成果は、次のようにいえるだろう。

まず、継続研究であったことによるプログラム内容の向上である。本セミナーでは、昨年度も研究班で開発したアクティビティ（ゲームや運動など）を取り入れているが、より円滑な流れや自己覚知の促進のため、さまざまな改良を加えた。例えば、学習の目的とのつながりをより明確にし、ふりかえりやシェアリングの時間を増やすことにした。

また、継続的な研修であったため、昨年度の参加者やその紹介者の参加など、学習の積み上げやネットワークの拡大を図ることができた。これは、本セミナーでめざした介入実践時のネットワーク、連携の拡大とも重なるものである。ネットワークの拡大は、単に活用できる社会資源の拡大にとどまらず、参加者各自のエンパワメントとしても有効である。

人材育成の受講者によって実際の教育現場でのカリキュラム開発につながったことは少人数による地道だが継続する育成事業の有効性と可能性を示唆するといえよう。とくに中学、高校での性教育の実践が困難になりつつある現在、性的にもっとも活発になる 18 歳以降でしかも性教育のない専門学校でカリキュラムにつながったことは大きい。昨年の研究では、専門学校の多くは学生の性の問題が直接間接に学生のドロップアウトにつながることは意識しつつも対応しかねていることがうかがわれた。今回の性のカリキュラムが学生の就学の継続に肯定的影響を及ぼすことを示す事ができればモデルケースとして業界に広がる可能性をもつといえよう。

今年度は 8 月と 2 月の 2 期にわけて実施し受講生を募集した。その結果、8 月には応募者が 30 名に満たず、2 月には応募者が定員を上回りお断りせざるを得なかった。いずれも北海道から九州まで応募はあり、広報活動も同じチャネルで実施したが、応募人数は偏った。（財）日本性教育協会とも検討したが、学校の教師は夏休みには研修に参加しにくくなっていることが判明した。したがって来年度は学校の夏休み期間中の講座開催は避け、別の時期を設定することを検討している。

## E. 結論

全国のさまざまな地域から多様な職種の参加者を迎えることができ、介入実践者の動機の強さとともに、人材育成研修のニーズの高さが示された。学校や地域での介入実践には、学校職員をはじめとするさまざまな資源との連携が不可欠であるにもかかわらず、現場ではそれらが十分に果たされているとはいいがたい。そのため、人材育成においては、個人の知識の増大だけではなく、より主体的な実践者として、連携のコーディネート能力の開発が求められよう。

本研究における人材育成プログラムでは、参加体験型学習により積極的な学びの場を提供するとともに、連携において重要となるプライバシーの問題や個人情報の扱いや、社会資源の活用について取り上げた。昨年度の人材育成の研究の成果をふまえ、再構成された本プログラムは、実践力・応用力のある人材を育成するという目標を達することができた。

## 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名 (冊子)	出版社名	出版地	出版年	ページ
ふれいす 東京	—	ふれいす 東京	“Living Together Letters” (手紙集)	ふれいす 東京	東京	2004	110
ふれいす 東京	—	ふれいす 東京	“Living Together” 2005 PR版	ふれいす 東京	東京	2004	11
ふれいす 東京	—	ふれいす 東京	「Hの強化書・ 実践編」	ふれいす 東京	東京	2004	12
池上 千寿子	HIV感染予防対策 の効果に関する 研究報告	ふれいす 東京	「ふれいす東京 年間活動報告書」 2003	ふれいす 東京	東京	2004	43-47
ふれいす 東京		ふれいす 東京	「AFTER18の性の 現状」	ふれいす 東京	東京	2003	4
徐淑子	安全な性行動 とは	ふれいす 東京	「性と保健行動」	ふれいす 東京	東京	2003	1-6
徐淑子	「予防的保健行動」 としてのコンドーム 使用	ふれいす 東京	「性と保健行動」	ふれいす 東京	東京	2003	7-14
野坂祐子	保健行動と メンタルヘルス	ふれいす 東京	「性と保健行動」	ふれいす 東京	東京	2003	15-18
ふれいす 東京	—	池上千寿子 生島嗣 兵藤智佳	Let's CONDOMing (映像)	ふれいす 東京	東京	2003	23分
ふれいす 東京	—	ふれいす 東京	“Sexual Health” ゲーム編	ふれいす 東京	東京	2003	30
池上 千寿子	若者の保健行動の 分析と有効な介入 への試み	ふれいす 東京	「ふれいす東京 年間活動報告書」 2002	ふれいす 東京	東京	2003	36-39
池上 千寿子	禁欲・純潔の 強調でなぜ HIV/STDは防 げないか	日本家族計画協会・ 家族計画国際協力財 団・ふれいす東京・ 人間と性教育研究協 議会	「アメリカの 禁欲主義 教育と日本の 性問題」	エイデル 研究所	東京	2003	34-51

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
池上千寿子	HIVポジティブ、共に暮らす社会	健康教育	35巻16号	12-16	2004
池上千寿子	保健に関する予防介入と倫理的課題	日本エイズ学会誌	6巻8号	138-140	2004
池上千寿子	「愛」にせかされる子どもたちへのケアを具体的に	体育科教育	52巻2号	15-16	2004
池上千寿子	世界のHIV/AIDSへの取り組み	季刊セクシュアリティ	第16号	24-30	2004
池上千寿子	セクシュアルヘルスのすすめ	日本衛生学雑誌	59巻2号	126	2004
池上千寿子	米の禁欲主義教育政策とブッシュの戦略	季刊「女も男も」	2003秋号	16-17	2003
池上千寿子	若者の性と保健行動および予防介入についての考察	日本エイズ学会誌	5巻1号	48-54	2003
徐淑子	パートナーとの官営生の認知	日本性科学会 雑誌	22巻1号	141	2004
東優子 徐淑子 兵藤智佳	若者のセクシュアル/リプロダクティブ・ヘルスに対するピア教育の理論と実践	日本エイズ学会誌	6巻3号	129-132	2004
東優子	テレビドラマに描写される性の保健行動メッセージの分析	現代性教育研究 月報	4月号	1-6	2004
東優子 池上清子 浅井春夫	世界と日本の性教育—どこに向かって いるのか	季刊セクシュアリティ	第16号	6-23	2004
東優子	日本の若者と性の保健行動	家庭科教育	2003年 9月号	13-17	2003
生島嗣	Living Togetherという戦略	日本エイズ学会誌	6巻3号	126-128	2004
生島嗣	男性とセックスをする男性」への支援を より有効なものに	保健婦雑誌	59巻9号	38-42	2003

平成16年度厚生労働科学研究研究費補助金

エイズ対策研究事業

HIV感染予防対策の効果に関する研究

総括・分担研究報告書

発行日 平成17年3月

主任研究者 池上千寿子

169-0075 新宿区高田馬場4-22-46-304

Tel:03-3361-8964 Fax:03-3361-8835

E-mail:research@ptokyo.com